

P. B. シェリーの「マブ女王」翻訳

—第1編から第3編まで

池 田 景 子

1. はじめに

1811年12月に P. B. シェリーは長編詩「マブ女王—哲学詩 (*Queen Mab: A Philosophical Poem*)」の着想を得て、1812年4月から1813年2月半ばの間にその大部分を執筆する。その後、この作品は1813年5月21日に印刷に回されるが、印刷されて本として形になるのはその年の12月末である。しかし、そのころまでにシェリーは、この作品があまりに急進的で出版を実現するのは難しいと考えるようになる。そこでシェリーは印刷された250部のうち70部を、共感してくれるであろう個人に配ることにする。作品の構成は、冒頭の献辞詩「ハリエットへ (To Harriet)」と9編から成る本文の韻文、散文で書かれた膨大な注である。献辞詩はシェリーの最初の妻、ハリエットに捧げられたものである。ここでは献辞詩及び、第1編から第3編までの韻文を翻訳したい。

2. テキストの翻訳

ハリエットへ

愛は世界中で輝きを放ち

軽蔑の毒矢をかわす。その愛は誰のものか？

熱烈で特に好まれる賞賛は誰のものか？

美德の与える最も優しい報酬は誰のものか？

私のよみがえる魂は、誰の表情のもとで

真実味を持って熟し、高潔で勇敢なものになったのだろうか？

誰の目を私は溺愛して見つめ、

人類をもっと愛するようになったのだろうか？

ハリエット！あなたです。あなたは私の中でもより純粋なほうの精神でした。

あなたは私の歌にインスピレーションを与えてくれました。

ここにある早咲きの、野生の花々はあなたのものです。

私が花輪にして飾ってあげましょう。

この愛の誓いをあなたの胸に刻んでください。

そして、時が変化して年月がめぐっても

すべての花が私の心の中で群生していることをわかってください。

その花はあなたに捧げます。

第 1 編

死はなんとすばらしいものか

死と兄弟にある眠りも！

ひとり、彼方にある、欠けゆく月のように、青白い顔をして

気味の悪いほど青白い唇をしている。

もうひとり、朝のようにバラ色をして

大洋の波に座するとき

世界を真っ赤に染める。

だが、そんな風に通り過ぎていく両方ともがすばらしいのだ。

そんなとき陰鬱な力の支配は

腐敗した地下埋葬地に及び、

罪のない彼女の魂をつかんで離さないのか。

愛と称賛は比類なきものを鼓動する心臓を持たずに目にするなどできない。

そんな比類なきものは消滅しなければならないのか。

雪の平原を流れる小川のように、細々と進む

青い水脈は、息づく大理石のように美しい輪郭だが、

それもまた消滅しなければならないのか。

腐敗の吐息が

この天に広がる光景の何物も

忌まわしさや荒廃を除いて何物も

残さないのだろうか。

最も軽薄な心が教訓を引き出す

重苦しい主題を除いて何物も残さないのだろうか。

あるいは、感覚にこっそり影響を及ぼす、

心地よい眠りだけだろうか、

バラ色の朝がつく吐息が

暗闇の中にまで追いかけていくのは。

アイアンシーが再び目を覚まし、

忠実な胸に喜びを与えるだろう。

その胸にある不眠の精神はアイアンシーの微笑みから

光、生、歓喜を掴もうと待っているだろう。

そうだ！アイアンシーは再び目を覚ますだろう。

彼女の輝くような肢体は動かず、

その優しい唇は沈黙を守っている。
かつては、息づく雄弁さが
虎の怒りをなだめて
征服者の冷たい心を溶かしていただろう。
露を帯びたような、彼女の眼は閉じられて
そのまぶたは、きめ細かく
その下にある暗青色の眼球をほとんど隠さない。
赤子の眠りはだれかの枕となり、
彼女の金色をした髪は
その胸にある穢れない誇りを隠す。
ツタが巻きひげ状に
大理石の柱の周りに絡みつくように。

聞け！あの押し寄せる音はどこからくるのだろうか？
人気のない廃墟の周りで高まる、素晴らしい調べのようだ。
神の靈感を受けた人はこだまする海岸をそぞろ歩きして
その調べを日暮れ時に耳にするのだ。
その調べは西風の吐息よりも優しく
見知らぬ堅琴が奏でる
不規則な調べよりも不規則だ。
その堅琴の弦を引いているのは
そよ風の精霊だ。
明るい虹の線は
大聖堂の窓にそそぐ月光のようだが、
その色合いは地上に類を
見ることがない。

見よ！妖精の女王を乗せた馬車を。
天上を駆け抜ける馬たちは、びくともしない空気をひづめで搔いていく。
その馬たちは女王の命を受けて薄い翼をたたみ、
光の手綱に素直に従って立ち止まる。
女王の呪文はこれらをたぐりよせて
あたりに魔法をふりまく。
その空靈的な車から、優美に身体を傾けて
女王は長い間、眠れる乙女を
だまって見つめている。

おお！夢の中でヴィジョンを授けられた詩人も、
その当惑した頭の中を銀色の雲がよぎり、
美しく、自由奔放で、壮大な光景すべてが
驚愕させ、狂喜させ、上昇させ、
空想が一目で
すばらしいものと美しいものを組み合わせたときでさえ、
空中を走り抜けるものの手綱を引いて
乙女の眠りを
見つめて魔法を注ぐ女王ほど
明るく輝き、美しく、自由奔放な姿を
見たことがなかった。

黄色い満月が
女王の姿におぼろげな光を照らし出した。
その姿は完璧な左右対称だった。
真珠のように輝く半透明な女王の車は
月光の軌跡を動かなかった。

それは地上で行われるような仮装行列などではなかった。
その光景を眺めていた者は
あらゆる人間の栄光を捨ておいて
黄色い月にも、
人間の光景にも目をやらなかった。
夜風が吹き荒れる音にも、
地上の音にも耳を貸さなかった。
ただその美しい行列だけを見て
人のいない住まいを満たす
天上の調べだけに聞き入っていた。

女王の身体は軽い。繊維のような雲は
夕べの最も淡い色合いだけをつかんでいて
西の黄昏時にできる影の中に溶けていくとき
目を凝らしてもほとんど捉えることのないような状態でも
それほど薄く軽くはない。また、美しい星も
明けの明星の輝く花冠に宝石のような光をちりばめて
これほどまでにやさしく力強い光をほとばしることはない。
女王の姿から燃え立ち、
その光景の周りに紫色の光輪を放ちながら
波打つようなしぐさで
女王の輪郭を優美に揺さぶるものほどには。

女王を乗せた天上の車からは
妖精の女王が降りてきて
杖を3回まわし
不凋花の花輪で円を描いた。

女王のほっそりとして霧のような姿は
動く空気と動作を同じくした。

女王の発する

銀鈴を鳴らしたような口調は
天賦の才を持つ耳でなければわからない。

女王

星よ、最も穏やかな影響力を注げ。

元素よ、怒りを抑えよ。

大洋よ、汝の領域を囲む

岩の境界線で眠るがよい。

向こうに見える、草の生えた廃墟の高みの周りを

吐息が動き回るのを見られないようにせよ。

休むことを知らない雪迎えを

不動の空中で眠らせよ。

アイアンシーの魂よ、汝はただひとり

羨望的である恩恵を受けるにふさわしいと位置づけられ、

善と誠意の人々を待ち望んでいる。そして、

闘ってきた人を、断固とした意志で

地上の傲慢さと卑劣さを打ち破ってきた人を、くびきや

因習という氷の鎖を打ち破る人を、その時代に現れる

明けの明星を輝かしてきた人を待ち望んでいる。アイアンシーの魂よ。

目覚めよ、立ち上がるのだ。

突如として

アイアンシーの魂は立ち上がった。その魂は

飾らない純潔さで美しく

その体つきは非の打ちどころがなく、
表現できない美と優美さを備えるようになった。
世俗性という汚れは
なくなり、もともと持っていた気高さを
再び取り戻して、墮落の中にあって
不滅のものとなった。

長椅子にその身体は横たわり、
眠りの深みに包まれていた。
顔立ちは固定され、意味がなかった。
しかし、動物としての生がそこにあった。
すべての器官が
正常な機能を果たしていた。それは
身体と魂を眺める、感嘆の光景だ。
全く同じ容貌、全く同じ
本質のものがそこにいた。
けれども、おお、なんと違うのか。ひとりは天を熱望し、
とこしえの遺産を求め、
常に変化し、常に飛翔しながら、
永遠の存在として戯れる。
もうひとりは、しばらくの間、境遇と情熱という
気の進まない遊びと格闘する。
そして、その悲しい時間をすばやく駆け抜けてゆく。
そのあと、消耗しきって役には立たない機械のように、
傷んで朽ち果て去っていくのだ。

女王

精霊よ！これほどまでに深く潜る者よ。

精霊よ！これほどまでに高く舞い上がった者よ。

汝は恐れを知らず、優しい者。

汝の価値にふさわしい恩恵を受けよ。

私とともに車に乗るがよい。

精霊

私は夢を見るのか。この新たな感情は

単に眠りという幽霊が見せるヴィジョンにすぎないのか。

もし私が本当に魂ならば、

肉体から離脱した、自由な魂が

再び私に話しかけてくる。

女王

私は妖精の女王。私には

人間世界の驚異が与えられ、それを保持している。

計り知れない過去の秘密で、

人間の尽きることのない良心の中にある。

あのいかめしく、追従しない記録者たちを見出す。

原因から生じる未来を

すべての出来事の中に集める。

因果応報の記憶が

利己的な人間の厳しい胸に植え付ける棘や、

美德の追従者が、素晴らしい日々に起きた思想や行動を

まとめようとしたときに感じる

恍惚として、歓喜にあふれた鼓動を

私は予言も記録もできない。

許されているのは、

死すべき運命にある人間の脆さを覆うヴェールを引き裂くこと。

そのヴェールを変わらぬ純潔さで掛けたのは精霊で、その精霊は

その存在ゆえの偉大な大義がいかに早く達成されるかを知っているだろう。

そして、精霊はすべての生が最終的に分かち合う平穏を味わっているだろう。

これこそが美德の与える報酬なのだ。幸せな魂よ、

私とともに車に乗るがよい。

女王と魂は先へ進んだ。

銀色の雲が二手に分かれていった。

魔法の車からふたりが降りると、

再び言葉のない音楽が高まっていった。

再び空中を駆ける者たちは

青い翼を広げ、女王は

光の手綱を振って

進むように命じた。

魔法の車は先へ進んだ。

夜は美しく晴れ渡り、あまたの星が

暗青色をした天空にちりばめられていた。

ちょうど西方の波の上に

朝の最初に見せる微笑みがあふれたところだった。

魔法の車は先へ進んだ。

天上のひづめから

炎のように輝く空気が飛んでいき、

燃えるような車輪が

山の最もそびえたつ頂上の上空を渦巻くように動くところに
一筋の稲妻の跡があった。

今や、車はひとつの岩のはるか上空を飛んでいった。

その岩とは、地上で最大の縁であり、
アンデス山脈に匹敵するもので、その黒い崖は
銀色の海の上まで下がっていた。

その馬車が辿る道のはるか下に
眠れる赤子のように穏やかに
途方もなく大きな大洋が横たわっていた。

静けさを湛えた鏡は
青白い光を放つ星と
馬車の美しい軌跡を映していた。
そして、朝のほの暗い光が
飛びゆく雲に色を付けて
夜明けの天蓋を覆うさまを映していた。

馬車は
大きな天空の真ん中を通っているように思われた。
そして、その天空はあまたの星座で輝き、
数えきれないほどの色彩の影で彩られている。
そして、その天空は帯状の筋で半分囲まれて
その筋からは絶え間なく流星が放たれていた。

魔法の車は先へ進んだ。
目的地に近づいていくと
駈ける者たちはスピードを上げていくように思われた。
海はもはや目立たず、大地は

広大で曖昧な領域と思われた。
雲に隠れていない太陽は
真っ暗な天空を運行していった。
すばやく差し込む光の筋が
その馬車のもっと素早い進路のまわりで分れて、
船の舳先の前で
波立つうねりから打ちつけられた
羽のようにやわらかい、海の水しぶきのようであった。

自然の精霊よ、ここへ！
この果てしない広がり
計り知れなさで
飛翔の空想さえも、ぐらついている
そんな広がりの中に、
汝に相応しい神殿がある。
だが、吹き抜けるそよ風にも震える
最も軽い葉にも
やはり汝は宿っている。
最も卑しいうじ虫も
墓の中で潜んで死者を肥やしに太っているが、
やはり汝の永遠に続く吐息を分かち合っている。
自然の精霊よ！汝よ！
この光景のように不滅の者、
ここに汝に相応しい神殿がある。

第 2 編

もし孤独が汝の歩みを
粗野な海の音がこだまする海岸へ向かわせ、
そして、太陽の大きな球体が
燃え立つ波の上に安らいでいるように思われる時まで
汝がそこにたたずむのなら、
汝は沈みゆく球体の上に
動かずにかかる、深紅色に染まる黄金の
筋を見守ったにちがいない。
ダイヤモンドの花輪を戴き
黒玉の岩のように突出して
耐えられないほどの輝きを縁に飾る、
うねり高い雲を汝は見守ったにちがいない。
けれども、太陽の最も高い頂上が一部分だけ
海の西方にある縁の上に星のように現れるような瞬間、
はるか遠くで羽のように軽やかな金色をした雲が
最も深い深紅色でばかされて
暗青色をした海に浮かぶ島のように輝く瞬間、そんな瞬間がある。
そんなときは、汝の空想が地上を離れて舞い上がり、
女王の神殿内部で
その疲れた翼をたたんだのだ。

だが、向こうに見える光の洪水の中で輝く
黄金の島も
太陽の明るい長椅子の上で広がる
羽のように軽やかなカーテンも

豪華なドームを覆う
磨かれたようにつやのある海の波も
マブ女王の空靈的な御殿ほどには
美しくてすばらしい光景を見せてはくれない。
けれども、晩の円天井、あの美しい大邸宅に最も類をなす。
天が波に低く寄り掛かるとき、天は
きらめく光の床面を
広大で紺碧の円天井を
銀色の海に漂う
肥沃な黄金の島を
広げた。
そのとき恒星があたりを取り巻く暗闇を通して
ひとつになった光を投げかけ、
まわりを囲む美しい狭間胸壁が
天の広大なる姿を見渡したのだ。

魔法の車はもはや動きを止め、
女王と精霊は
魔法の御殿に入ってしまった。
紺碧の空の下
きらきらと照り映える海の中でうねる
黄金の雲は
その空靈的な足取りで震えることもない。
光と深紅の霧は
神々しい住処に漂い
感動を呼び起こすような旋律を持った調べに合わせてそっと動き、
その意志のあらゆる動きに屈する。

霧がひかえめに湧き出ていると精霊は知り、
あたりに押し寄せる様々な至福のため
美徳と智慧の
栄光ある特権を使わなかった。

「精霊よ」と女王は言った。
そして、女王は豪華なドームを指さして言った。
「これはすばらしい光景だ。
そして、すべての人間の尊大さをあざ笑っている。
だが、歓びの衝動をすべて退け、
自らの牢獄の中に閉じ込めて
天上の宮殿に住むのが
美徳に対する唯一の報いだとすれば、
変化のない本質をもった意志は実現されないだろう。
他の者たちを幸せにできるようにせよ。精霊よ、来い。
これが汝の受け取る報酬だ。過去が生じ、
現在が見えるだろう。私は
未来の秘密を教えてやろう。」

女王と精霊は
頭上に張り出す狭間胸壁に近づいて行った。
下には宇宙が広がっていた。
想像力の飛翔を抑制する
最も遠くの境界線ほどはるか彼方に
数えきれない、永久の天体が
迷路を進むような動きで自由に交差し合い、
それでもなお、永遠の自然の法則を

変わらず遵守していた。
頭上で、眼下で、周りで
循環のシステムは
調和の集まりを形成していた。
それぞれが逸脱しない目的を持って
雄弁な沈黙さで空間の深みを通り
その驚くべき道を進んでいた。

霧のかかった広がりの中できらめく
小さな光があった。
その運行する天体に気付いているのは、
精霊の目のみだろう。
地球の住人が起こす行動のひとつひとつを捉えているのは、
天上の住処以外の場所はなく、
精霊の眼だけだろう。
だが、事物と、空間、時間は
この空靈的な御殿で作用しなくなっている。
あまねく知恵がその美点によって生み出される収穫を刈り取るとき
地上にいる魂が克服しようとするのをためらうような
障害を乗り越える。

女王は地上を指さした。
精霊の知性あふれる目は
その同族の存在を認めていた。
群がる何千もの人が、その目の前を通りすぎてゆき、
アリ塚の市民のように思われた。
なんと！

最も卑劣な存在を動揺させる
情念、偏見、利害。
そして、最も繊細にできている神経を動かし、
ひとりの人間の頭の中で
最も熱意のない思考を引き起こし、
自然の偉大なる鎖の中で繋がりとなる
かすかな才覚。

「見よ」と女王は叫んだ。
「パルミラの廃墟となった宮殿を。
見よ、壮大さが顔をしかめるところを。
見よ、歓びが微笑むところを。
今残っているのは何か。無分別と
恥の記憶だ。
そこでは何が不滅なのか。
不滅のものなど何もない。その記憶は厳粛な警告を
発する憂鬱な物語を
語るためにあるのだ。まもなく
忘却が静かに
名声の残りを盗んでいくだろう。
そこにいる君主たちと征服者たちは
尊大に、ひれ伏す何百万もの大衆の上を進んでいく。
人類の地震だ。
地震のように、人々の衝撃を記す
廃墟がなくなれば、忘れ去られてしまう。

「永遠なるナイル川のそばに

ピラミッドが建っている。

ナイルは変わらず自らの方向を進んでいくだろう。

ピラミッドは朽ち果てるだろう。

そうだ！ひとつの石もピラミッドが存在するその場所について
語るために存在しないだろう。

ピラミッドのあった場所は忘れ去られてしまうだろう、
それを建造した者の名前と同様に。

見よ、向こうに見える不毛なる土地を。

そこでは今や彷徨えるアラブの天幕が
砂漠の突風にはためている。

かつてセイレムの気高い神殿が
天高く黄金の円蓋を千もの数を建て、
一日のバラ色に染まった顔の中で
その恥ずべき栄光をさらしていた。

おお！多くの窓を多くの孤児が呪っていた。
その神殿の建物自体を呪っていたのだ。そして多くの父親が、
労働と隷属で疲れ果てて、その貧しい人の神に
地上から労苦を吹き払って
老いぼれソロモンの虚栄心をなだめるために
石の上に石を積み重ね、人生最高の日々を汚す
忌まわしい仕事を子どもたちにさせないでほしいと懇願した。
そこには悪魔神におぞましい賞賛の声をあげる
動物的で粗野な人種がいた。

奴らは戦争へと突入し、母親の子宮から
まだ生まれていない子どもを引き裂いて取り出した。老齢と幼少が
ごたまぜに朽ち果てていった。奴らの勝利に満ちた腕が

人に息をさせまいとしたのだ。ああ！奴らは悪魔だ。
だが、そんな奴らに自然と慈愛の神は
血のやり取りを特別に認可したと教えたのは何者だ？
そいつと奴らの名前は朽ちていき恐怖が名誉となるまで詐欺行為は
蛮族の国にまつわる物語を暗唱して、結局は忘れ去られてしまうだろう。

「アテネ、ローマ、そしてスパルタがあった場所に
今は死すべき運命にある砂漠が存在する。
いやしくてみじめな小屋
もっと破廉恥な御殿が
こんな古代の神殿と対照をなして、
今や忘却へと崩れていく。
長く孤独な柱廊も
自由という亡霊が通って行き、
われわれが耳にするのを好んだ大切な光景の中で
悲しみのうちに思い起こす
有名な旋律のように思われる。
だが、もっと多くのことが変化していたとしても
人間の本质が見せる対比はもっと憂鬱なことだ。
ソクラテスが息絶えて、暴君の奴隷が、
臆病者が、愚か者が周囲に死をばらまき、
震えおののきながら、自らの死に会う。
そこではキケロとアントニウスが生きて、
頭巾をかぶり偽善的な修道士が
祈りをささげて、呪いをかけ、欺くのだ。

「精霊よ！今もお野蛮人が

敵の血を飲んで、ヨーロッパの息子の猿真似をしながら
戦争の墮落した歌をよみがえらせる荒野で
荘厳な都市、
西の大陸における首都が出現して以来、
1万年もの時は
ほとんど過ぎ去っていない。
今、苔むした柱石は
時が弛まず支配したことで、鋸歯状の形になっている。
その国が滅亡さえしなければ
堂々たる姿をたたえていたというのに。
そこでは、人の手が加えられていない森の光景が広がり、
長期間にわたって人の手が入っていない庭のような
粗野な魅力を持っている。
そして、そんな荒野で偶然足を一瞬止め、
不本意ながらもそこに留まる者からすると、
その場所は地球が今の姿であるときから存在してきたかのように思われる。
けれども、かつてそこは最も気忙しいたまり場であり、
共通の中心地に関しては、
部外者、船、商品が群がる場所であったのだ。
かつては平和と自由が祝福されて
洗練された平原だったのだ。
ところが、富、人間の呪いが
その繁栄のつぼみを枯らしたのだ。人間が
永遠に類することを誇る魂にふさわしい
祝福を与えられるのは美德、智慧、真実、自由だけだと悟るまで、
美德、智慧、真実、自由は
逃げ去って戻ってはこない。

「向こうの地球には、生きた人間がかつていたのを除けば
ひとつの原子も存在しなかった。

最も濃い雲の中にかかり、

人間の静脈を流れる

雨の最も微細な粒さえも存在しなかった。

そして、リビアの怪物たちが怒号する

燃える平原から、

グリーンランドの太陽が顔を見せない気候が支配する

最も陰鬱な谷、

肥沃なイングランドの

黄金の平野が広がるところまで

一日もたがわず得られる収穫は

都市のないところで

ひとつも見いだせないだろう。

「人間の誇りとはなんと不可思議なものか！

私は汝に言おう。こんな風に生きる者にとって、

朝には芽を出して

正午前にはしおれてしまう草のもろい葉が

ひとつの無限の世界なのだ。

私は汝に言おう。目には見えない存在の、

館は無感覚の空気の中で

最小の粒子であり、

そんな者が人間と同様に考え、感じ、生きているのだ。

そして、そんな者が抱く愛情や嫌悪感が

人間と同様に、法律を作りだし、

倫理的あり方を支配する。

そして、最も微小な鼓動が
その身体を満ちわたり、
その最も希薄でかすかな動きが
定められて必須となる。
あの運行する天体を支配する
荘厳な法律と同じに。

女王は立ち止った。精霊は、
賞賛で恍惚となり、
過去の知恵がすべて復活したと感じた。
古く驚嘆すべき時代の出来事は
ぼんやりとした伝統が途切れがちに
信じやすい民衆に教えるものである。
その出来事は釣り合いをとって開示されたが、
計り知れなくぼやけていた。
精霊は孤立した粒子の上に高く
立っているように思われた。
その下にはせめぎ合う年月の洪水、
頭上には無限に広がる宇宙の深みがあり、
すべては
自然の変わらぬ調和にある。

第 3 編

「妖精よ！」と精霊は言った。
そして、精霊は魔法の女王に
空靈的な眼を向けた。

「汝に感謝する。汝は
私が甘んじて受けようとしないう恵を与え
学ぶことのない教訓を教示してくれた。私は
過去を知っているがゆえに、人間が
自らの過ちから利益を得て、
その愚かさから経験を引き出せるよう
未来への教訓を
探り出すつもりだ。
というのは、喜びを告げる力は
意志に匹敵するならば、人間の魂は
その他の天国など必要とはしていないから。」

マブ
振り向くがよい、優れた精霊よ！
だが、多くのことは識別されぬまだ。
汝は人間がどれほど偉大か知っている。
汝は人間の弱さも知っている。
だが、汝は人間がどんなものを学ぶがよい。
絶えず動いていく時が、生きとし生ける魂に
用意してくれる高邁な運命を学ぶがよい。

豪華な宮殿を見よ。それは
人々のひしめく都市の中にあつて、千もの塔をそびえさせ、
それ自体が都市のように見える。歩哨の陰鬱な一団が
いかめしく物静かな列をなして
その都市の周りを囲んでいる。そこに住む者は
自由にも幸せにもなりえない。父親を持たぬ者の呪いが、

友を持たぬ者のうめき声が、汝には
聞こえないか？王は前進する。金箔を張った鎖をまとい、
自らの魂をみじめさに縛り付ける者、廷臣には
君主とあだ名される愚か者、その一方で、最も卑しい欲求に縛られる
奴隷。ひどい貧国の挙げる悲鳴には
気にも留めない男。その男は、赤貧にあえぐ者が陰で
ぼそりと漏らす深刻な呪いをせせら笑う。そして、何千ものの民が
飢えから切望するすべてのものを取り上げて、その男の気まぐれで
楽しくもないどんちゃん騒ぎに浪費された食べ物に対して、何千ものの民が
うめき声をあげるとき、不機嫌な喜びがその冷血な心を満たす。
その男が恐怖の物語を耳にすると、偽善的な同意を
作る顔の方を向き、恥のほてりをしめ殺して、悪意が
自らのうぬぼれた頬に輝くようにする。
今や、沈黙で、壮大で、行きすぎた食事に
あの男の弱くて意志のない食欲は引きずり込まれている。もし、
周りで輝く黄金と季節ごとに収穫される食べ物が
気が進まない味覚に飽満感を抑える力があれば、
もし、富が—それは毒からくみ上げることのない源泉ではあるのだが、—
あるいは、悪徳、感情のなく頑固な悪徳が、その食べ物を
死に最も至らしめる毒に変えなければ、
あの王は幸せだ。そして、強いられない仕事を
こなす百姓も夕方、家に帰り、巻束をかかえて
仕事がかどった人に対して払われる歓迎のあいさつに
ふたたび出会い、これ以上やさしい食事を味わうことはない。
さあ、あの王を見よ。
豪華な馬車にのって肢体をのばす者を。あの王の熱で火照った頭は
しばし、めまいを起こしたようによろめく。だが、ああ。あまりにも早くに

飲酒による眠りは鎮まり、
良心、すなわち死ぬことの無いへびは、
自分の有毒な子どもをその夜の仕事へと呼び出すのだ。
聞け！あの男が話す。おお、あの血迷った眼をよく見よ！
あの死人のような顔立ちをよく見よ！

王

中断するな。
おお、これは永遠に続けなければならないのか。畏怖の念を抱かせる死よ、
私は汝を抱きしめたいと願いつつ、なおも恐ろしいのだ。夢も見ず眠れる
瞬間はない。ああ、いとしく尊い平和よ。
なぜ、汝は貞淑な純潔を
貧困や土牢の中に覆い隠してしまうのか。なんのために汝は
危険、死、孤独とともに潜んでいるのか。一方で、
私が汝のために建ててやった御殿を避けるのはなぜだ。聖なる場であるのに。
一度でよいから私を訪ねてくれ。ただし、そのときは憐みの心で
私のしなびれた魂に一滴の香油を垂らしてくれ。

女王

うぬぼれの強い男よ！あの御殿は高潔な心だ。
平和は汝が持つておるような小屋で
その純白の衣を汚したりはしない。聞け！あの男はぶつぶつ文句を言っておる。
あの男の眠りは雑多な悩みにすぎない。
そんな悩みはサソリのように、人生の活力をえじきにする。
過ちを犯す者を罰するために
偏屈者が考案する地獄は必要ない。大地それ自身が
悪と呪いを同時に持ち合わせているのだから。

そして、すべて足りている自然が
その法則を侵犯する者を懲らしめられるのだ。自然だけが、
その過ちに対してどれくらいの割合で罰を与えればいいのかを
知っているのだ。
この哀れな恥知らずが自らの悲嘆に誇りをもっているのは
おかしくはないか。
自らの卑しさに歓びを感じて、自身を消耗するさそりを
胸に抱いているのはおかしくはないか。棘だらけの
派手な王座に座り、
鉄の笏を手し、豪華な牢獄に
閉じ込められて、その厳しい境界線からは
地上で良しとされるものや、大切なものから切り離された状態で、
魂がその人間性を主張しないのはおかしくないか。
人間の穏やかな性質が王の仕事に対抗する
戦争において生じないのは、おかしくないか。いいや、おかしくはないのだ。
あの男は、民衆と同じく、自らの父親がしたように
考え、感じ、行動し、生きている。先の、征服できなかった権力と慣習が
王と美德の間に介在するのだ。見知らぬ者よ、
自然を知らず、現在から未来を演繹しない者にとって
自然に背いた存在である罪に苦しむ奴隷であるようには見えないだろう。
その子供たちが飢え、結婚の寝床が
大地の憐みを受けることがない懐となる、恥知らずには見えないだろう。
その恥知らずが腕をあげて、王座から自らを追放するようには見えないだろう。
宮廷で日向ぼっこをして
その崩壊を種に私利を図る金持ちは逃げ去ってしまう。奴らは何者だ？
社会の雄バチだ。奴らは
職人たちの労働で養われているのだ。飢えに苦しむ農夫は

奴らのために、頑固な耕地を無理やり耕して
手に入らない作物を刈り取ろうとする。そして、向こうにいるむさ苦しい者は
肉の削げた惨めな者よりもやせこけて、不健全な鉱山で
太陽のない生活を無駄に過ごし、遅延性の死を労働の中で引き出していく。
そうして、奴らの威厳を満たしていくが、
ものぐさに掛けられた苦労や悲嘆にはほとんど誰も気づかないだろう。

汝はどこから王と太鼓持ちが生まれるか知っているのか。
どこから雄バチの不自然な血統が生まれるか、王と太鼓持ちのために
宮殿を建てて、毎日のパンを用意する者たちに押し掛かる
苦労と絶え間ない貧窮をだれが積み上げているのか、
悪徳、すなわち真っ黒で忌まわしい悪徳から、
強奪、狂気、欺瞞、邪悪から、
窮状を生み出し、この地上から
とげだらけの荒野を作り出すあらゆるものから、淫欲、
復讐、そして殺人からだ…。そして、理性の声が
自然の声よりも声高に、この全人類を覚醒するとき、
そして、人類が悪徳は不協和音を鳴らし、
戦争も窮状も同じだと気づき、美德とは
平和であり、幸福であり、和合であると気づくとき、
人間のより成熟した本質が子供時代に
遊んでいたおもちゃをさげすむようになれば、王のような輝きが
判断を鈍らせる力を失うだろう。また、その権威も
静かに消えゆくだろう。豪華な王座は
王の大広間で誰の目も引かなくなり、
朽ちてしまうだろう。同時に、欺瞞に満ちたやり取りは
真実に満ちたものが今そうであるように

憎まれる対象となり、そこから不利益を被るものとなるだろう。
地上にいる虚栄心の強い強者が
不朽のものとしようとする名声はどこにあるのか。
おお、時の軽やかな足取りが立てる
もっとも微かな音は、時代の潮時を波立たせる
極めて小さい波は、何においても
見せ掛けだけのあぶくを飲み込んだりはしない。しかり！今日、
暴君の命令は厳しく、わびしさを表す眼は凝視するも、
血走っており、群衆を散らす腕っぷしは
強い。明日はやってくる！
その命令は過ぎ去った過去の中に
朽ち果てた雷鳴である。その雷鳴に
真夜中は終焉を迎え、そのついで
蛆虫は自分たちの楽しみを享受するのだ。
高潔な者は
その謙虚さにおいて優れ、少しも尊大ではない
王たちのようである。また、そんな者は
比類ないほど、断固とした善の生活を送り、
身を震わす審判よりももっと自由で恐れを抱かず
静かな地下牢のような奥まったところで立っている。
そんな者は金銭ずくの力でくるまれて、むだに
冷淡な精神を束縛しようとする。そんな者がくずおれたら、
その眼はもはや慈愛の光を発しない。
その手はしなびて、単に安心させるためだけに伸ばされるだけだ。
罪を犯したものをぎょっとさせるためだけに
理性が言葉巧みな説得をしても、沈んでしまうだけだ。そうだ！墓は
その目の光を消し、死の容赦ない寒気のせいで

その腕はしなびてしまう。だが、色あせない名声は
美徳によって、誓願して信念に身を捧げた人の墓の上に掛かっている。
そんな者を永遠に記憶にとどめようと、王たちは
思いをはせて身を震わす。幸せな精神が
地上で見事にやりとげた巡礼のことを考えるときに想起する思い出は
決して消え去らないのだ。

自然は君主を排斥するが、人間を排斥しない。
臣下は市民を排斥しない。なぜなら、王たちと
臣下は互いに敵同士だからだ。彼らは永遠に
負け戦の中で互いに勝利のカギを握ろうとして
その掛け金は邪悪でみじめなものとなる。徳ある精神の
持ち主は命令もしないし、従いもしない。
権力が、この世を荒廃させる疫病のように
触れたものすべてを汚染する。そして、従順さが
天分や美徳、自由、真実の命取りとなり、
人間や人間の体が隷属した状態を作り出す。
機械化された自動人間だ。

ネロが
炎に包まれるローマを見下ろして残虐な喜びを抱きながら
悪魔のように顔をしかめ、狂喜した耳で
苦しみあえぐ死の叫びをとらえて祝杯を挙げた。
そして、恐ろしいほどの荒廃が進んでいくのを目にし、
自らの魂の中で新しく作られた感覚が
その光景に合わせて震え声で歌い、その音に合わせて振動したのだ。
汝はこの男の尊大さが
人間に備わっている思いやりの力を抑えなかったと思うか？

そして、ローマが容赦ない一撃で暴君を叩きのめさず
自身大切にしている血で真っ赤に染まった腕を押しつぶさなかったら、
従順な卑しさは自然の提案を
破壊しなかったと思うか？
向こうの地上を見よ。
黄金の収穫物が一斉に広がる。尽きることのない太陽が
光と生命を注いでいるのだ。果実、花、木々は
自然な形で継承されて現れる。あらゆるものが
平和、調和、そして愛を口にする。世界は
自然の口には出さない雄弁さで
すべてが愛と喜びを成就すると宣言する。
あの見捨てられた人間を除いたすべてのものが。その男は
自らの平和を突き刺す剣を作っている。その男は
自らの心にかみつくへびを大事にしているのだ。その男は
悲痛のなかに喜びを見出し、
苦悩のなかに戯れを見出す暴君を励ましている。彼方に見える太陽よ、
偉大なものだけを照らすのか。彼方に見える波よ、
王たちの住む高樓に比べると、小さな家の草吹き屋根の上では
やさしく夜を明かさないのか。母なる大地は
多くの息子たちにとって継母であり、
絶え間ない苦労に人に分け与えない贈り物をもたらすのか。
気楽で贅沢に育てられ、子供時代に慣れ親しんだおもちゃを
大人たちに作り、自己中心的な幼稚さで
大人たちだけが価値を認めている平和をかき乱す、
そんな赤子—哀れっぽい声で泣きわめく赤子にとって唯一の母となるのか。

自然の精霊よ！そうではない。

汝の本質が清純なまま拡散されると、
人間の心の中でも同じように脈打っている。
ああ、汝はそこに立ち、
力の玉座は控訴できない。
汝が審判の場でうなずけば
人間の束の間手にする脆弱な権威は
風が所在なく通り過ぎていくように
力をなくしてしまう。
神が人間を凌駕するのと同様に
人間による裁きに
まさる裁判所は汝の玉座なのだ。

自然の聖霊よ！汝は
無限の群衆の生命、
天の深い沈黙の中を不変の道が通る
力強い天球の魂。
最も小さき存在の魂。
その生命が4月の太陽が見せる一筋の光となる住処。
このような受け身の事物と同様、人間は
汝の意志を無意識のうちに遂げる。
こういった事物と同様に、
果てしない平穏さのうちに積み重なる人間の年齢は、
時がすばやく成熟させて
たいまち、確実にやってくる。
そうして、汝が広く行き渡らせている、抑制のない体制は
完璧な均整を非の打ちどころがないほど
損ねているだろう。

* 翻訳テキストの底本としては以下の参考文献を用いた。

参考文献

Shelley, Percy Bysshe. *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*.
Eds. Donald H. Reiman and Neil Fraistat. NY: Norton, 2002.